

JMAT医療救護活動報告

福岡青洲会病院 看護師 田中 知子

このたびの東日本大震災に際し、福岡青洲会病院は災害拠点病院として日本医師会の災害医療チーム「JMAT」として、医療救護活動を交代で行いました。

今回は、福島県いわき市での活動報告を掲載いたします。

期間：平成23年4月1日(金)～

4月4日(月)

場所：福島県いわき市

東日本大震災発生日

3月11日(金)14:46

JMAT福岡第4班

医師 原 祐一

医師 矢成亮介

看護師 田中知子

看護師 古田勇輝

事務 吉武友裕

東日本大震災発生から3週間たった福島県いわき市は、地震・津波被害に加え福島原子力発電所の被爆被害により強制退去命令が

出ている地域からの被災者を受け入れている地域でした。自らの地域も地震被害により被災していましたが、集会所や公民館、小・中学校の体育館、各病院・特養等の施設に被災者を受け入れていました。復興の兆しは見えている場所もありますが、被爆圏内30kmは津波被害にあった行方不明者の捜索や被災地の瓦礫等の対応も出来な



いままの状態が続いていました。現在も余震が続く、原子力発電所より放射能問題も改善されないまま、被災者は自宅に帰る目途もたっていない状態でした。30km圏外でも未だ瓦礫の撤去が進んでいない場所や、道路・鉄道も開通していない区域があり、避難所生活が長期化する様子がうかがえました。

福岡第4班チームとして避難所を巡回診療しましたが、避難所により復興の状況に温度差があると感じました。電気の復旧は出来ていたが水道が使えないため仮設トイレでの排泄や、被災後3週間でもありましたが、一方では、近くの温泉を利用し毎日ではないが入浴出来ている避難所もありました。支援物資は衣類、毛布、ペーパーや飲料水は満たされつつありましたが、食事はインスタントラーメンやレトルト食品、パン、カロリーメイト等が多く、高血圧や糖尿病、慢性疾患に対する治療食にまでは及んでいませんでした。そのため、さらに血圧が上がったり、血糖コントロールが出来ない、微量元素



不足による貧血やめまい等も多く発生してしまいました。食事生活のみに限らず、集団生活によりプライバシーを保つことが出来ないことや、いまだ続いている余震による恐怖、いつ元の生活に戻れるかわれからの生活への不安は計り知れない状況でした。これらの不安や恐怖により精神不安定な状態となったり、不眠状態の方も多くいらっしゃいました。

避難者はかかりつけ医も被災しているため定期薬も不足していたり、津波で逃げてくるのに精一杯で病院へ通う交通手段がない方が

ほとんどでした。巡回診療している医療救護の医師へ診察してもらい内服薬を一時処方してもらい慢性疾患の治療を継続していました。しかし、内服薬を重複し服用していたり、日々変化する自身の症状に服用方法がわからなくなる方もいらつしやいました。JMAT活動班に薬剤師も加わり避難所内で積極的に内服指導を行っていました。避難所は、現在慢性期に入っています。エコノミクスクラス症候群予防のため、ボランティアの方が体操を行ったり、リハビリスタッフによるボランティア、福島県立医大専門チームによる巡回診療、心のケア(メンタルヘルス)専門チームによる支援活動、小児感染症巡回診療を行い、これ以上の犠牲者を出さないよう支援活動をおこなっていました。

3日間避難所を巡回しましたが、巡回診療で症状を訴えて来られる方は対応できていますが、避難所の隅でひっそり寝ていたり、こちらの様子を伺っているような方々にも自らが声をかけ、「大丈夫です」の言葉の裏に潜んでいる身体症状

の観察や、話をしっかりと傾聴し気持ちの表出を行っていくことが重要と感じました。病院診療は患者が自ら受診し治療を受けますが、東日本大震災の状況下ではこれ以上の犠牲者を出さないために、医療従事者が地域に出向き異常の早期発見に努めていくことが重要な役割となると感じました。

4月1日～4月4日の間の医療救護活動は医療や看護の原点を振り返るものとなり、この短期間で人々と向き合い、心身のケアが出来たのだろうかと思ったり、レンマを感じながら帰福しました。私たちは九州の地で「今、医療人としてできること」を日々考えながら行動していくことが、これからの支援に繋がると思います。

